

「被災地でカリカチュア(似顔絵)と対話でみんなを笑顔にする」事業

被災地の病院や仮設住宅で日々闘っている子どもと家族に絵と対話の交流を通して笑いと感動とサプライズを!

ユーモアたっぷりに描かれた似顔絵を見ていると、自然と笑顔がこぼれ、会話も弾む。そんな楽しいひとときを被災地の人たちに届けたいと、カリカチュアのアーティストたちと宮城県を回って交流会やワークショップを開催している。絵を通して生まれる、人と関わることの喜びや新しい発見が、明日への勇気につながる。

絵を描きながらのおしゃべりから被災地の抱える問題が見えてくる

公益社団法人「難病の子どもとその家族へ夢を」は、2010年の設立以来、難病の子どもとその家族を東京ディズニーリゾートなどに招待する活動を行ってきたが、昨年からは多くの被災地の家族も迎え入れてきた。

さらに今年度はAJOSCの助成を受け、被災地の家族とカリカチュアを通して交流する事業を開始した。カリカチュアとは、人物の個性を誇張して表現するアメリカ生まれの楽しい似顔絵アート。カリカチュア・ジャパンの協力を得て所属アーティストたちと宮城県の被災地を回り、2013年5月から2014年2月までに、かねてより交流のある宮城県立こども病院に入院中の子どもとその家族、そして今なお仮設住宅で暮らす家族を対象に、ライブスケッチ交流会とワークショップを各8回ずつ開催してきた。病

院以外では、市民会館、幼稚園、小学校などを会場にして実施した。

「カリカチュアは普通の似顔絵と違ってデフォルメして描くので、そこに笑いとサプライズが生まれます。それをきっかけに話に花が咲いて楽しい時間を過ごしてもらえればよいし、描いた絵が後々家族の会話の糸口になればよいと思います」と話すのは、同法人の理事を務める柴田礼子さん。

柴田さんたちが最も大事にしている活動の基本は「対話」である。それは、支援するされるという関係ではなく、お互いに役割があり必要とされる関係を築くためであり、実際、家族の生の声を聞いて気づかされることは多いという。対話をする際は、何か媒介するものがあると気持ちがあぐれて本音も出やすくなる。今回のように楽しく個人的なアーティストたちに似顔絵を描いてもらったり、描き方を教わりながら笑ったりたわいもない話をしていったり、被災地が抱えるさまざまな問題が見えてくるという。

「被災地で職を見つける困難さだったり、地域による支援の格差の大きさだったり、今なお仮設住宅に住む人の気持ちだったり。それでも皆さん、大変な状況の中で元気に頑張っていってらっしゃる。私たちの役割はそういう人たちの声を拾い上げていくことだと思っています」



厳しい状況の中で日々を過ごす子ども病院（左写真）や仮設住宅（右写真）の子どもたちにとって楽しいカリカチュア体験となった



みんなのカリカチュア展覧会チラシ（2013年10月仙台市にて）



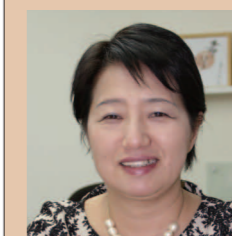
仙台市のみんなのカリカチュア（展覧会のパンフレットより）

新たなコミュニケーションを生むカリカチュア効果

活動は、交流会やワークショップを行って終わりではない。被災地の子どもたちが描いた絵を多くの人に観てもらったための展覧会&報告会も開催している。「実はこれが大事なんです」と柴田さん。展覧会&報告会はこの活動や被災地の実情を多くの人に知ってもらう機会であり、また、被災地で厳しい状況の中にいる子どもたちが、自らの絵を認めてもらう嬉しさや誇らしさを通して自信や自己肯定感を持つことができる場でもあるのだ。AJOSCの助成によって被災地だけでなく東京や大阪で開催できたことでより発信力が高まったという。

「『〇〇君すごいね』とか『この子はこういうこともできるのか』と、友達や周りの人から一目置かれたりする。展覧会はそういう新たなコミュニケーションを生むきっかけ

担当者より



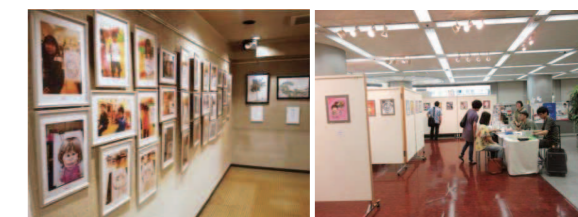
被災地宮城県を広く訪問することができました。

公益社団法人難病の子どもとその家族へ夢を
理事
柴田礼子さん

AJOSCの助成により被災地宮城県の広い範囲を訪問できました。心より感謝いたします。また、私たちはまだ小さい団体なので、こうして年間報告書の形で紹介していただくことは大変有り難いことです。多くの方に、難病と関わっている子どもや被災地で頑張っている人たちがいることを知っていただき、支援のあり方を考える機会になればと思います。

の場になっているのです。カリカチュアがきっかけになって会話が生まれたり、これまでとは違うその人の一面が見えてきたり、仮設住宅のコミュニティの内外で家族の交流が生まれたり、絵を描く趣味に目覚めたという人もいます。ひとりひとりの中に明日へとつながる新たな展開が生まれているとしたら、それはとても嬉しいことです」と柴田さん。カリカチュア効果はさまざまな形で現れている。

実は、ライブスケッチの際に、多くの人が震災で亡くなった家族やペットの写真を持参してきた。彼らも一緒に描いて欲しいと。震災から3年たっても人々の心が癒えることはなく、いやむしろ年月のたった今こそ、とりわけ子どもたちの心のケアの必要性を柴田さんたちは感じたという。「難病の子どもとその家族へ夢を」は、今後も継続して被災地の子どもと家族の心に目を向けた活動を行っていくとともに、地元の企業にも協力してもらおうなど、支援のあり方を探っていきたいと考えている。



展覧会の様子（右：大阪、左：東京）